

2019 SUPER GT 第1戦

岡山国際サーキット

2019年4月13日(土)

予選 来場者: 11,000人 天候: 曇り

僅か3ポイント差でタイトル連覇を逃してしまった2018年の最終戦から、早5ヶ月が過ぎ、リベンジに燃える2019年、LC500最後の年となるシーズンが開幕した。われわれLEXUS TEAM KeePer TOM'Sは、今年も同じドライバーラインアップ、平川 亮とニック・キャンディの最強の若手コンビで臨む。シーズン前のテストから順調にマシンセッティングを進め、両ドライバーはコースレコードタイムを更新。午前の練習走行では、10番手(1'18.493)。公式予選では、LEXUS勢として唯一Q1を突破し、Q2では7番手のタイムをマークした。



- 平川がQ1を担当、8番手でQ2への進出を果たした。
- 2016年に平川自身が記録したコースレコードタイムを更新する快走を見せた。
- キャンディがQ2を担当。
- 平川のタイムを0.2秒以上上回るタイムを記録して7番手のグリッドを得た。

Driver	Car No.	Qualifying 1		Qualifying 2	
平川 亮	37	P8	1' 17.906	P7	1' 17.693
ニック・キャンディ					

天候/路面	曇り/ドライ
気温/路面温度	16°C/25°C

平川 亮(37 号車ドライバー)



「ドライビングの感触はよくて、想定していたタイムよりも良いタイムで走ることができたので、100%では無いですが、まあ満足できるアタックでした。これでライバルに前に行かれたらしょうがないという状況でしたから、良い予選だったと思います。しかし、他のマニファクチャーとの差は感じますね。Q2 に唯一残れたのも良かったです。僕らができることはやったので、シーズンオフからやってきたマシンのセットアップ、タイヤのチョイスが結果として出てくれたかなと思います。それが他の LEXUS 勢との差に出たので、ハッピーです。予選のトップタイムは 1 分 16 秒ですが、それはわれわれには全く見えない領域、まだシーズンは始まったばかりですから、あまり悲観しないで今後のマシン開発に期待します。雨、ウエットのコンディションが予想されますが、ウエットなら荒れた展開が予想されて、その中では強さを発揮できると思います」

ニック・キャンディ(37 号車ドライバー)



「ライバルたちが速さを示すであろうと思っていたので、差が大きいことには特に驚きはない。マシンのセットアップには全く問題はなく、自分がマークしたタイムは LEXUS のトップタイムだったからハッピーだし、できる限りのことはやったという気持ちです。ウエットコンディションとなってもライバルの GT-R や NSX も速いだろうから、多くのポイントを稼ぐことは大変だと思いますが、ノーポイントというのも選手権を考えれば良くないから、できる限りポイントを獲得し、また今後のシリーズにプラスとなるテスト的なこともできればと思います」

小枝正樹(37 号車エンジニア)



「ドライバー二人が頑張ってくれて Q2 に進出した唯一の LEXUS として頑張ってくれましたが、あの結果が現状で精一杯というところですよ。事前テストの結果から見ても順当な結果、順位なりの現状の勢力であると思います。今日の走り出し、フリー走行では、コンディションに合わせたセッティングを出すのに少しだけ手間取りましたが、最終的に二人のドライバーが満足してくれるセットアップができました。7 番手グリッドですが、タイムは更新しているし、テストから進化はできていると思いますから、昨シーズンのように着実

にステップを踏んで上位フィニッシュできるようにしたいですね。明日の雨の量はどうか分からないので、スタート直前の状況に如何にうまくセットアップを合わせ込むかが勝負です」

山田 淳 (37 号車監督)



「亮(平川)がホームコースとする岡山国際サーキットは速いので、Q1 敗退を凌いでくれたと思っています。それをニック(キャシディ)がタイムアップ、LEXUS のベストタイムで締めくくってくれました。チームとしてできる限りのことはやった結果ですね。ライバルの叩き出したタイムは、予想よりも速かったです。そして、LEXUS のパフォーマンスは全体として皆さんがご覧になったようにライバルと比較して低いですね。しかし、その原因らしい原因は、掴めて来ているので、確実に、シーズンの半ばになるとは思いますが、巻き返せる可能性はあります。具体的には二機目のエンジン開発と、それまでのエンジンマネージメントで好結果を目指します。二人のドライバーの完成度は高いですし、コンビネーションも良いチームなので、それを結果に結びつけるように頑張ります」

館 信秀 (総監督)



「LEXUS で唯一、Q1 を突破したことは評価できるけれど、苦しい予選であったことは確かです。ライバルメーカーのタイムはちょっと次元が違っていました。決勝は同じような状況になるかはまだわかりません。雨の予報ですので、その状況で少なくともポイントを獲得できるようチーム一丸となって決勝に臨みます」

2019SUPER GT 第1戦

岡山国際サーキット

2019年4月14日(日)

決勝

来場者:17,400人

天候:雨

開幕戦はあいにくの雨、ウェットコンディションでスタートが切られた。

LEXUS 勢の最上位グリッドからスタートを切って、上位フィニッシュが期待されたが、レースはスタート直後からアクシデントが続発。セーフティカーラン、中断が繰り返されるという予想外の展開となった。一度目の中断の後再びのセーフティカースタートの最中にスピン。大きく順位を落としてしまった。最終的に4度目にセーフティカーがコースインした後に32周して走行中止、レース終了となっており、規定によって30周目時点の順位が決定した。



- キャシディ(ニック)が、スタートドライバーを担当した。
- 直前のウォームアップ走行で3番手のタイムを叩き出し、決勝は、ポイントゲットは確実視された。
- 2種類のレインタイヤの中から、固めをチョイスして装着。
- セーフティカーの先導で3周した後に4周目からレースがスタート。しかし、直後にアクシデントが発生し、再びセーフティカーランとなり10周目から再スタートとなった。
- 大きなアクシデントが発生し赤旗中断となり、14周目からセーフティカーランで周回が開始された直後に、キャシディがスピン。クラス再後尾まで順位を下げてしまった。
- 20周目からレース再開。24周目に再びアクシデント発生。セーフティカーがコースインし全車を先導して32周した時点で、二度目の赤旗により走行中止、レース終了の判断が下された。
- 平川 亮のドライビングチャンスは無かった。

Driver	Car No.	Race Result/Fastest Lap	
平川 亮	37	P12	1' 34.819
ニック・キャンディ			

天候/路面	雨/ウエット
気温/路面温度	12°C~12°C/14°C~13°C

平川 亮 37号車ドライバー



「決勝は、モニターを見つめているだけで終わったのですが、何度も大きなアクシデントが起こって、レースが中断し、状況はどんどん悪くなっていったので、レース中止、終了という判断は正しかったと思います。自分にはドライブのチャンスは無かったので、不完全燃焼どころか、着火もしなかったですね」

ニック・キャンディ 37号車ドライバー



「タイヤのチョイスを間違ってしまったことに尽きるかなと思います。そして、順位を落としてしまったのは、自分の大きなミス。セーフティーカーラン中にタイヤを冷やしたくなくて、ウェイブしていてアツという間にスピンしてしまいました。チームには本当に申し訳ないことをしてしまったと思います。ドライバーとして、ステアリングを握っているのは自分だから、責任は自分にあります。天候の変化は誰にもわからないけれど、運にも恵まれなかった週末でした」

小枝 正樹 37号車エンジニア



「ドライの状況に比較するとウエットの方が良い展開になるかなと思っていたのですが、残念です。雨の量が少なくなってゆく予測だったのですが、全く逆でした。レーシングスピードで走れたのは数周ですから、タイヤが十分に温まることもなかったようです。スピンの原因はそこにあるでしょう。柔らかめのタイヤをチョイスしていたらという反省もありますが、何れにしても厳しいレースになったと思います。今シーズンのライバルたちとの勢力関係も見えてきたので、今後も厳しい状況は覚悟していますが、その中でより良いセ

「ツティングを見つけるべく努力します」

山田 淳 37号車チーム監督



「今回、少なくともポイントゲットするのが目標でしたが、スピンによって大きく順位を落としてしまったのは残念でした。予選のドライコンディションでは苦戦していたのですが、ウエットのウォームアップで一気にLEXUS 勢が上位を占めて面白くなってきたので、順位アップを狙って、もしかすると表彰台も狙えるかなと思っていただけに残念です。次戦ではトヨタさんも手を加えてくれると言っているので頑張れると思います」

舘 信秀 総監督



「LEXUS の最上位からスタートを切っただけに、スピンして 500 クラスの最後尾まで落ちてしまっただけはダメですね。しかし、それだけ厳しい状況下でドライブしていたということだとも思います。しかし、我がトムスは、2 台のマシンを擁しているからこそ、各々全く違った作戦、タイヤのチョイスもあったかなとも思います。各々は、同じ会社の傘下といえども一度レースとなれば、ライバルだからしょうがないけれども、今後はそのような決断を下すことも考えなくてはならないと思いました」